

給付金がつないだ母との糸



コロナ禍を歩く

自分が「死んでいる」と分かったのは、東京都新宿区役所の窓口を訪れた時だった。緊急事態宣言が明けただけの2020年6月上旬。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う10万円の給付金を申請した孝志さん(57)は、戸籍を見た職員から、2年前に「失踪宣告」が出ていると知らされた。「死亡届のようなものです」。驚きはなかった。唯一の肉類である母とは、もう20年以上会っていない。親族などの申し立てに基づき、長年消息の分からない人を裁判所が法的に死亡扱いとする失踪宣告。いったん宣告を受けながら、その後に取り消しが認められて「生き返った」人たちがいる。コロナ禍で人と「距離」を取るものが求められる中、失っていたつながりを取り戻した人たちは、どんな事情があったのだろうか。そんな疑問から取材を始めた。世の中が様変わりしたこの1年、生き方を考え直した人も少なくない。世間と絶縁して生きてきた人もきつと影響を受けているはずだ。宣告を取り消し

へ社会の表の男性失踪



高尾経済成長期のただ中、孝志さんは新宿で母子家庭の一人息子として生まれ、光化学スモッグの発生が相次いだころ、幼子の

情報が記載された官報を頼りに首都圏のアパートや福祉施設を訪ねた。「コロナがなければ僕は一生、失踪宣告のままのはずだった。生きているのか死んでいるのか分からない状態のまま、死んでいたんでしょね」。10月下旬、新宿の簡易宿泊所に出会った孝志さんは、身の上を語り始めた。それは期せずしてコロナがつないだ、親子の細い糸をめぐる話だ。

健康を案じた母は、郊外の八王子に引っ越した。父親は、物心ついた時からいなかった。デパートで働く母は、土日も仕事でいなくなった。中学一年の時、母が再婚した。警備員だった義父は毎日、カップ酒を4、5本は飲んだ。夜になると板張りの台所に呼ばれ、正座したまま竹刀で体中を殴られた。理由はよく覚えていない。ただ連れ子が憎らしかつただけかもしれない。

「逃げるよ」。高校入塾直後の5月ごろ、母がそうさやいた。教科書と制服だけ持って飛び出した。新宿区のアパートで母子2人暮らしが始まった。深夜までファミリーレストランで働き、学費をためた。母は、母が眠ったあと、朝起きると、母はずでに仕事に出ていた。それでもテールにはいつも、昼食代の500円が置かれていた。

高卒後、バイト先のファミリーレスで社員になった。間もなく店長に昇格し、都心の店を渡り歩いた。パールの時代。早朝から未明まで立ちっぱなしで働き、家ではほんの数時間眠るだけ。母と顔を合わせる時間はほとんどなくなった。32歳で体を壊し、仕事を辞めた。「水商売は染めた、面白いぞ」。元同僚の誘いで、夜の世界に足を踏み入れた。キャバクラ、ヘルス、ピンサロ。ファミリーレスほどきつくな。月収が120万円に達したこともあった。羨しかった。寮や友人宅を転々とするうち、母の待つ家には帰らなくなった。

5年ほどたった。明け方、店で働く女の子を送る際、家のそばを通りかかった。母のことを思い出し、車を降りて行ってみた。木造2階建てだったはずのアパートは、鉄筋3階建てに変わっていた。母はいなくなっていた。

携帯電話もなかったころだ。母の行き先は知れず、自分の住民票がどこにあるかも分からなかった。でも、

夜の世界なら働ける。健康保険証も年金手帳もないから、頼りは現金だけ。しゃかりきになって稼いだ。「僕は結婚できないよ。住民票がないから、籍が入られない」。交際相手にそう告げた。結婚を望む彼女とは、やがて別れた。それから約20年間、歌舞伎町のカプセルホテルで暮らして続けた。横になれる空間と衣類を入れた三つのロッカー、大浴場もある。十分だった。母はどうしているだろう。40代まではよく考えることもあったが、50代になると思い出すことも少なくなった。

東京・大塚の店に勤めていたとき、新型コロナウイルスの感染拡大が始まった。20年4月の緊急事態宣言を機に店は休業し、そのまま閉じた。収入の道が途絶えた。区役所で生活保護を申請した時、所持金は6000円に減っていた。

6月に給付金をもらおうとしたら、失踪宣告が出ていることが分かった。このままでは給付金を受け取れない。翌日、東京家裁に取り消しの申請をしたが、身元を証明するものがなかった。古い友人や元交際相手を訪ね歩き、昔の写真でもいいからと探したが、一枚も残っていないかった。

結局、自分が自分であること証明してくれたのは、母だった。家裁の調査員が行方を突き止め、連絡を取った。「うちの息子で間違いないですよ。よろしくお願います」。母はそう語ったという。「お元気で暮らしていただきますよ。生きてるんだ」。いつしか、亡くなったと思ひ込んでいた。調査員の説明で、小さな安心感がわいた。

6月に直居の取り消しが正式に認められ、孝志さんは社会に生き返った。簡易宿泊所で生活保護を受けながら、新たな仕事を探すが、給付金は締め切り間に合わなかったが、それでも良かった。「今までは金がなくなったら終わりだった。これからは表の社会で、一般企業で働ける」。語り口はいつも前向きだ。

その後の取材で実父は7年前に亡くなったと分かった。孝志さんはまだ母と連絡を取っていない。50代だった母は、もう61歳だ。「いきなり現れても向うも困るだろうし、何年も経ったらかたじけなくて。金はいらないよ」。そして、会えない理由を探そうとした。「自分がコロナがもしら大変なことだから」。取材を重ねるうちに気づいた。母のことを口にする時、孝志さんの話し方には思いやりがにじむ。「お母さんも会いたがっていると思えますけどね」。そう尋ねると、少し間があって言葉が返ってきた。「仕事や住み家が見つかってコロナが落ち着けば、その時は会いに行ってもいいかもしれない」。細い糸はつながっている。木々に差し込む、冬の淡い日差しのように。

【金子淳】

らしが始まった。深夜までファミリーレストランで働き、学費をためた。母は、母が眠ったあと、朝起きると、母はずでに仕事に出ていた。それでもテールにはいつも、昼食代の500円が置かれていた。

高卒後、バイト先のファミリーレスで社員になった。間もなく店長に昇格し、都心の店を渡り歩いた。パールの時代。早朝から未明まで立ちっぱなしで働き、家ではほんの数時間眠るだけ。母と顔を合わせる時間はほとんどなくなった。32歳で体を壊し、仕事を辞めた。「水商売は染めた、面白いぞ」。元同僚の誘いで、夜の世界に足を踏み入れた。キャバクラ、ヘルス、ピンサロ。ファミリーレスほどきつくな。月収が120万円に達したこともあった。羨しかった。寮や友人宅を転々とするうち、母の待つ家には帰らなくなった。

5年ほどたった。明け方、店で働く女の子を送る際、家のそばを通りかかった。母のことを思い出し、車を降りて行ってみた。木造2階建てだったはずのアパートは、鉄筋3階建てに変わっていた。母はいなくなっていた。

携帯電話もなかったころだ。母の行き先は知れず、自分の住民票がどこにあるかも分からなかった。でも、